(一)混乱からの脱却

終戦時の母校　昭和二十年度は、本土決戦をも覚悟しなければならない非常事態を迎え、授業停止の緊急措置がとられた。本校の生徒たちは勤労動員のため、日本鋳造鶴見工場、川崎の三菱重工業や横浜の日本製鋼所をはじめ、久慈鉱山、東北振興繊維、小岩井農場、盛岡専売局、盛岡電気通信工事局、岩手県警察、紫波不動村農業会、和賀郡湯田村などに出向いていた。

岩手中学校の校舎にもミシンが運び込まれ、市内の主婦たちが軍用靴下や下着などの縫製に従事していたため、〝学び舎〟というより〝町工場〟の感があった。職員は、佐々木哲郎校長以下数人の年長者だけが残り、二十数人の一年生が何班かに分かれて、空襲に備え宿泊していた。

職員室で終戦の玉音放送を聞いた山中順三教諭は、何も知らずにトランプ遊びをしていた生徒たちに、「戦争は終ったんだぞ」と話した。年はの行かない一年生たちは、それがどんなことを意味するのかよく理解できないまま、山中教諭を囲んで泣き出した。

そのあと山中教諭は、校長室にいた佐々木校長に、「これから天皇陛下をどうしたらいいか、一番問題になりますね」と問いかけた。すると校長はおだやかな口調で、「山中君、それはおのずと時が解決してくれるよ」とつぶやいて、少しも動じる気配を見せなかった。山中教諭は、〝さすがに校長は、むだに年齢を重ねていない〟と、その平静さに胸を打たれる思いがしたという。

復校してきた生徒たち　戦争が終り、勤労動員で各地に四散していた職員と生徒が、ふたたび学園に復帰してきた。また召集されても内地で軍務についていた職員は、比較的早い時期に復職することができた。こうして以前のように、岩中の校舎に生徒と職員が通い出し、昭和二十年度の二学期から授業が再開された。しかし、そこにはさまざまな困難が待ち構えていた。

学校全体としてのもっとも大きな問題点は、職員も生徒も、敗戦によって目標を見失なったことだった。ついこの間まで、圧倒的な重みを持っていた軍国主義・全体主義が否定され、平和主義・民主主義の世の中になったのであるから、価値観の変化は極端であり、それについて行けない多くの人々が出た。

たとえば教職員の場合、担当教科の違いによって、価値観の変化からくる影響を受ける度合に差が生じた。イデオロギーと一応無縁な数学や理科などはまだよかったが、軍事教練などを担当していたこの間まで徹底した軍国主義教育を行なっていた教師は、教育方針の切り替えにともなう苦悩を、人一倍強く味わわなければならなかった。中には退職した教師もあったし、退職しないまでも深刻に悩んだ教師もいた。

生徒のうち、もっとも極端な変化を体験したのは、おそらく、予科練から母校にもどってきた者達であったろう。同級生の目から見れば、短刀を胸にかくし持ち、落下傘の切れ端で作った白い絹のマフラーを首になびかせ、酒やタバコの悪習を身につけて粋がる者も多かった予科練帰りは、はじめのうち、別世界からやってきた異人種のような感じがした。しかし当人たちは、国家のために文字どおり一命を投げ出す特攻教育を受けていたのであり、戦争が終ったことによって、自己の存在価値が無に帰するという、まことに虚脱的な立場に立たされていた。いわば、軍国主義の犠牲者だったわけである。この精神的動揺を克服するすべを知らず、粗暴な行動に走って学園の秩序を乱す者も一部にはあったが、時の経過とともに、大半の者は新しい時代に柔軟に順応する方向に向かって行った。

白紙答案事件　一時目標を見失なっていた生徒たちも、スポーツや文化活動に、また上級学校への進学にと、しだいに精力のはけ口を見出だすようになった。とくに知識欲は旺盛で、新刊本が少なかった当時、古本屋で本を探すことが大きな楽しみであった。当然、授業を受ける態度にも真剣味を増したが、戦後の一時期は職員数が少なかったり異動が多かったりして、生徒の向学心に十分応じきれない面もあった。

教員室がかかえていた問題は、単に手不足だけにはとどまらなかった。終戦を境にして社会の価値観ががらりと変ったが、社会人としての職員がそれに対処したしかたはさまざまであり、全体が一つにまとまるのは困難であった。結局、いろいろなタイプの教師が一度に出現したのである。中には、教室で同僚を誹謗するという人もいた。ま

た、教科書を棒読みにするだけの授業で済ませたり、農村出身の生徒に食糧入手を求める例なども出てきた。これに対して生徒の間から、一部教職員への不信の声が高まった。昭和二十二年の秋ごろのことである。

たびたび生徒大会が開かれ、何人かの教員についての排斥決議が行なわれるにいたった。その結果、十月三十一日の試験のとき、四年生全員がある科目で白紙答案を提出するさわぎになり、新聞種にまでなった。その後、対立感情は自然に収まったが、戦後の混乱期がまだ続いていることを思わせる事件であった。

昭和二十二年ごろの食糧事情は、今日から想像もできないほど悪く、教職員も生活苦の渦中にあった。郡部に適当なつてを持たない教員なら、生徒から買い出し先の情報を得たい衝動にかられるのも、当然だったかも知れない。しかし生徒たちは、どんな事情のもとでも、やはり教師らしい教師を要求するのであろう。そんなところにも白紙答案事件の持ち上がる背景があった。

新聞と演劇　終戦はわが国に混乱と貧困をもたらしたが、同時に数々の光明をも与えた。その最大のものは、精神活動の自由が保障されたことであった。軍国主義・全体主義の重圧がなくなり、平和主義・民主主義の世の中になった事実は、若者たちに目まいのするような解放感を与えた。当然、読書意欲にかられたけれども、物資不足は若者たちの欲望を満たすだけの出版物を市場に出回らせず、彼らはやむなく古本屋をあさり、図書館で知識を吸収した。

向学心に燃え出した岩中生も、乏しい書物をむさぼるように読んで、精神の飢えをいやそうとした。しかし、そうしているうちに、しだいに読書だけでは満足しなくなった。青春の精神的エネルギーが、何らかの媒体を通じて自己を表現することを求めたのであった。自然発生的に数人の同志が集まり、手さぐりで探しあてたはけ口が、新聞の発行であり、あるいは演劇の発表だった。岩中における戦後の文運は、まず新聞と演劇という形をとって興隆の気配を示す。

〔新聞の発行〕

学園が混乱からの脱却に努めていた昭和二十二年に、本校最初の校内新聞が発行された。坂井修治・台博見・佐久間和夫・山口謹一・西在家寛などの五年生有志が自主的に作ったもので、ガリ版刷りながら有料で販売し、飛ぶような売れ行きであった。七月三日に第一号、九月二日に第二号、九月二十二日に第三号、十二月六日に第四号を発行している。

校内新聞発行の相談は、四月ごろから持ち上がった。会合の場所としては、図書室がよく用いられ、〝新聞とは何か〟〝学校新聞の意義如何〟といった話題をめぐって、かなりの時間をかけて論議した。だれも、学校新聞の経験もなければ知識の持ち合わせもなく、手本にできる先例もなかった。議論が暗礁に乗り上げると、よく「岩手日報」や「岩手新報」の記者を訪ねて知恵を借りた。

不安と期待のうちに第一号を刷り上げたが、いざ販売してみると、たちまち売り切れた。巻頭言に佐々木校長の寄稿文をかかげ、文化部・体育部の動静や教師のエピソードを紹介し、連載小説まである「校内新聞」であった。この創刊号の成功で、一同の意気はすこぶる上がった。それからは山中教頭から二階のあき部屋を正式に開放してもらい、そこを編集室にした。

秋の運動会には号外の発行を企画し、高速印刷機まで備えていたが、豪雨襲来で運動会は中止となり、号外もまた流れた。ただこの日、〝校内新聞改題に際し校友諸君に告ぐ〟と題して、「校内新聞」を「石桜新聞」と改める旨の声明書を公表した。そして第四号は、「石桜新聞」の名称で発行した。

その後、いくつかの学級新聞や学年新聞が生まれ、たがいにケンを競った時期がある。それらがしだいに統合されて、昭和二十五年三月五日、活版の「石桜新聞」創刊号が出され、現在まで続いている。したがって、同紙の通算号数に、ガリ版刷りの「校内新聞」や「石桜新聞」の分は算入されていないが、実質上はその先駆をなす、記念すべき校内新聞であった。

〔演劇の発表〕

昭和二十三年ごろになると、学生芸能会や映画観覧の催しが持たれるようになり、学校にも娯楽がふたたびもどってきた。この芸能会あたりをきっかけにして、台博見・佐藤拓弥・中村六郎などが語らい、岩中演劇部を創設した。

ちょうどそのころ、工専と医専の同好の士が集い、高専演劇連盟を結成して、県公会堂で公演を行なった。これに刺激された市内各中学の演劇部

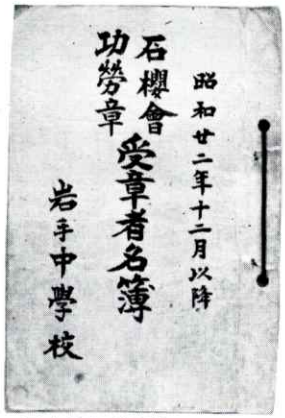
員が、岩中演劇部をリーダーとする盛岡市中等学校演劇連盟を結成し、第一回発表会にトリーヌ作のフランス近代劇「署長さんはお人好し」を上演することにした。演出は本校の台博見である。

女優がいなくてはと、岩手高女に出演交渉したが断られ、やむなく男だけで演じる腹を決めた。発表会直前は学校に合宿して練習に励んだが、電力不足の世相とあって、毎晩のように断続停電に悩まされ、ろうそくに頼らざるを得なかった。食べものといえば、すいとんであった。

そんな苦労が実って、第一回発表会は大成功を収め、「岩手日報」紙上で演劇評論家の細越広人から絶賛された。また、校内で開かれた芸能祭では菊池寛の「父帰る」と取り組み、これも拍手かっさいを浴びた。

部員はほとんど素人ばかりであったが、舞台を通じて自己を表現したいという情熱に、全員が燃えていた。そのためには、疎開以来盛岡に住んでいた中央の演劇人をたずね、積極的に教えをこう労もいとわなかった。こうして、盛岡の演劇界に岩中ありとの声価を高めるにいたったのである。

石桜会功労章


昭和廿二年十二月以降
石櫻會
功勞章
受章者名簿
岩手中學校
同上受章者名簿

特別課外自由研究

昭和二十二年度の二学期から、〝自由研究〟ないしは〝スーパーバイズド・スタディ〟と呼ばれる制度が発足した。これは正規の授業以外に、教職員がそれぞれの専門を生かした研究題目を設定し、生徒がそれを自由に選択して、課外指導を受けるというものであった。大学のセミナーにも相当するこのユニークな制度は、その後数年間続けられ、学園の学究的な雰囲気をもり上げるのにあずかって力があった。

ちなみに、二十二年度の自由研究のテーマと指導者は、つぎのとおりであった。

俳句の研究	淵沢行雄
短歌の研究	小田島理平治
短歌の研究	水原一
日本国憲法	高橋浩
歴史常識の範囲	小林博
新聞記事による社会研究	佐藤恭六郎
立体の裁断	千田助治
幾何学一般についての研究	梅木豊
天気の移り変りとその判断	阿部巌
植物病理、地質鉱物	鈴木健郎
遺伝学	吉田長作
構図の研究	小笠原哲治
徒然草の研究	石川舜瑞

岩高の徽章きまる

岩手高校の徽章が決まったのは、新制岩手高校が誕生した昭和二十三年の、秋のことであった。「岩」の古字「嵒」の上に桜花を配して石割桜をあらわした図案は、小笠原哲治教諭のデザインになるものである。旧制高校式の模倣におちいることなく、おざなりを排し、独特な味を出そうと、半年を費して構想を練った苦心作である。

山菜採り休日

戦後の食糧危機は深刻だった。昭和二十一年五月に米の配給が止まり、代りに砂糖・大豆・大豆カス・魚・トウモロコシ粉・干ブドウ・干アンズなどが、ほんの少しずつ配給された。市民の食生活は底をつき、人々は食糧の買出しに狂奔した。古間木方面へジャガイモを求めに行ったり、奥中山や山田線の区界・浅岸方面へ山菜採りに出かけたりした。

このような食糧危機に対処するため、本校では〝山菜採り休日〟なるものを設けた。これは、ほかの学校でも実施されたが、数日間臨時休業とし、生徒にワラビ・ゼンマイ・フキなどの山菜を採る機会を与えて、家庭の食糧確保にいくらかでも役立たせようというものだった。二十一年度は五月二十七日から三十日までの四日間、二十二年度は五月二十九日から三十一日までの三日間、また二十三年度は五月二十八日二十九日の二日間が、それぞれこの〝山菜採り休日〟だった。

算盤、書道、ラジオ組立修理　鈴木武彦
器械体操、器具体操　戸嶋正夫
タンブリング、体育舞踊　前沢肇
英単語、英詩の研究　高橋与平
聖書の研究　山中順三

石桜会功労章の制度発足　新聞の発行や演劇の発表、あるいは運動・勉学への熱中と、本校の生徒はしだいに若者らしいエネルギーのはけ口を見出すようになり、学校は学園らしさを取り戻して行く。しかし、その情熱を発散する方向は個々人でまちまちであり、バランスのとれた生徒の理想像は、まだ確立されていないのが昭和二十二年ごろの状況であった。

戦前・戦中であれば、各学期末の成績はすべて講堂に張り出され、だれが優等生かは一目瞭然であった。その優等生の中でも、文武両道にすぐれた人物は、たとえば学校行事の際の〝軍旗持ち〟に選ばれて、全校生の信望を集めたものである。ところが、その〝軍旗持ち〟に相当するような生徒の理想像が、戦後はなくなってしまった。これを残念に思う気持は職員側にもあったが、むしろ生徒側に、新時代の自分たちの代表者を求める気運が高まった。

そんな空気の中から、「石桜会功労章」の制度が生まれたのである。二十二年の年末に生徒有志が語り合い、職員側に提議し、両者が相談した結果、つぎの案にまとまった。

一、受章資格

1、功績顕著であること。
2、人物の丙でないこと。
3、成績がすぐれていること。

二、受章者決定法

各学級委員長・応援団幹部・石桜会各部最高学年委員の共同会合にて推薦した者の中より、職員会議によって該当者を決定する。

三、授与の時期

授与学期の終業式

四、佩用の位置

上衣左襟章の左とする。

五、その他

同一受章者に対して重ねて授与せず。
受章者が学則第二十六条により処罰された際は返還させる。

右の受章資格・受章者決定法を見ても分かるように、新時代の生徒の理想像は、部活動にも学業にも精励し、校内のあらゆる分野からの評価を集め得る人間でなければならなかった。真のリーダーシップを身につけた全人的な代表者に敬意を示そうという考えが基本にある点で、戦後の民主主義が学園に定着し出した証拠ともいえる。

この案は正式に決定となり、昭和二十二年十二月二十日、第一号石桜会功労章の授与が行なわれた。受章者は第五学年の西在家寛で、生徒会活動における功労が認められたものであった。なお、団体功労章第一号は、昭和三十四年三月一日に、演劇部が受章している。その後今日にいたるまで個人の受章者は六十二号、団体の受章者は四号に

鉄拳制裁問題

昭和二十二年九月二十一日に盛岡で開かれた県下中等学校秋季大会に、本校から卓球と体操のチームが参加したが、日曜日だったこともあり、応援する生徒が少なかった。これに憤慨した五年生の応援団員二人は、翌日と翌々日、応援不参加者全員を校庭に整列させ、反省を求めて鉄拳制裁を加えた。

戦中や戦前なら、ごくありふれたこととして見逃されたに違いないできごとであったが、戦後の新時代とあって、そのアナクロニズムが非難された。しかし、中には応援団員の行動を是認する父兄もいた。ともあれ、愛校心や応援団のありかたに、反省材料を与えた事件だったことは確かである。

理髪部始末記

昭和二十二年七月、山中教頭から生徒会総務に、理髪部を設けてはどうかとの助言があった。当時七円の理髪料を節約させるための親心だった。さっそく大通りの淵沢床屋に交渉してバリカンを入手し、九月には石桜新聞編集室に開店の運びとなった。あざやかな手つきを誇る部員の面々は、藤村義三、武田昭一、佐藤敬朗、大森和夫、影山昭の五名だった。これが話題を呼んで新聞記事になり、他校生も見学に来た。しかし人気の理髪部も町の床屋との競争には勝てず、惜しくも一年で解散してしまったのである。

達しており、生徒に大きな励みを与えている。

伝統行事の復活　戦前、本校の学校行事は、まことに多彩であった。入学式、卒業式、始業式終業式といった型通りの行事のほか、寒稽古、兎狩り、創立記念式、勤労デー、体育デー、遠足行軍、マラソン、報恩旅行（修学旅行）、野外演習、水泳大会、岩手登山、正語会、運動会、教練査閲、義士会などがあり、行事のない週がほとんどないほどであった。

昭和二十年の敗戦によって、軍事や武道に関係のある行事はすべて廃止されたが、そうでないものも、校外に出かけて行なう催しは、事実上実施が困難であった。食糧事情が悪く、生徒も教職員も、空腹をがまんしながら何とか授業を続けている状態のもとでは、とても全校行事どころのさわぎではなかった。

しかし戦後一年が過ぎ、二年が経過するにつれて、混乱こそ尾を引いていたが、社会も学園も、しだいに活気をとりもどしてきた。そして、伝統的な行事が、一つまた一つと復活して石桜精神復活への緒を開いて行ったのである。

〔マラソン大会〕

昭和二十二年十月十六日、年齢別短縮マラソン大会が開かれた。すなわち、年齢に応じて全校をAからDまでの四組に分け、学校を起点および終点にして、A組は明治橋まで、B組は石川家まで、C組が御田屋清水まで、D組が放送局までの各市内周回コースを走った。距離は時節がら短縮されていたが、岩中健児の健在ぶりを示す戦後初の記念すべきマラソン大会となった。

〔修学旅行〕

戦前の報恩旅行は十日ぐらいの日数をかけて、東京・名古屋・奈良・京都・大阪方面を回る大旅行であったが、戦後はしばらくの間、食糧事情も交通事情も、そんなぜいたくを許さない時代が続いた。やっと修学旅行が再開されたのは、昭和二十三年の六月で、高三が足かけ五日の日光旅行に出かけたのであった。

〔岩手登山〕

昭和二年九月五日の校旗樹立式以来、岩手山への登山は、本校にとって、特別の意味あいを持つ年中行事となった。この由緒ある伝統行事も一時中断されていたが、昭和二十三年七月二十一日から二十三日にかけて、全校生からなる登山隊が岩手山へおもむいたのをきっかけにして、復活するにいたった。

(二)新教育への切替え

新制岩手高等学校の設立　戦後の新日本建設の大きな節目となったのは、いうまでもなく、日本国憲法の制定であった。昭和二十一年十一月三日に公布され、六カ月後の翌二十二年五月三日から施行されている。この新憲法の精神にのっとり、いちはやく教育制度の改革が行なわれた。具体的には、昭和二十二年三月三十一日に、「教育基本法」と「学校教育法」が公布され、即日施行になった。これによって、小学校六年間、中学校三年間、計九年間の義務教育が発足し、さらに高等学校三年間、大学四年間の学校体系が整えられた。アメリカに範をとった、いわゆる六・三・三・四制の誕生である。

私立中学として、二十余年の輝かしい伝統を持つ岩手中学校も、この新しい学校制度にもとづいて、変革を余儀なくされた。まず昭和二十二年三月二十七日に、新制の岩手中学校への移行を申請し、同年四月の新学期から、義務教育としての中学教育が始まった。また翌二十三年の二月二十六日に、岩手高等学校の設立を申請し、三月十九日に認可された。

その間の二十二年四月、佐々木校長から三田理事長あてに、校地拡張に関する請願書が提出された。学制改革にともない、新制中学・高校を合わせると六学年になり、旧制時代に比べると生徒数が一学年分ふえることがその直接の理由であったが、佐々木校長の意図としては、旧制の伝統を持つ学校が有利な立場に立ったこの機会に、本校の規模を一挙に広げてはどうかという考えがあったようである。すなわち、三田合資会社所有の本校隣接地（水田・現河北小敷地）約一万八千坪を校地に加え、校舎増築と校庭拡張を実現するとともに、図書館・体育館・寄宿舎・職員住宅なども新築する雄大な計画であった。しかしその水田は農地改革の対象となり、国が買収してしまったために、この計画は実現しなかった。

ともあれ、昭和二十三年度の新学期には、新制の岩手中学校と岩手高等学校の両校が出そろい、新しい教育内容のもとに、六年間の一貫教育を行ない得る体制が整ったのである。ちなみに、当時

校地拡張に関する請願書の控

新制高等学校設置認可申請書の控

新制中学校設置認可申請書の控

本校に寄せられた金森徳次郎の揮毫

戦後玄関につるされた横文字看板

の職員・生徒の概況は、学校長佐々木哲郎、教務主任山中順三のほか、左記のような学級編成であった。（　）内は担任の教員である。

〔高校〕三年　一クラス　54名（小林　博）
　　二年　A組　45名（淵沢　行雄）
　　B組　44名（佐藤恭六郎）
　　C組　45名（阿部　巌）
　　一年　A組　51名（鈴木　健郎）
　　B組　50名（高橋　与平）
　　C組　50名（水原　一）
〔中学〕三年　甲組　48名（中野　利興）
　　乙組　49名（高橋　浩）
　　丙組　48名（細野　幸一）
　　二年　甲組　55名（戸嶋　正夫）
　　乙組　58名（本間　寿雄）
　　一年　甲組　60名（小笠原哲治）
　　乙組　60名（吉田　長作）

世の中は敗戦の痛手からまだ抜けきれず、ことにも食糧事情は苦しかった。さらに二十二年のキャサリン台風、二十三年のアイオン台風と天災が続き、県土は荒廃していた。しかし、新制への切替えを果たした学園内には、一種の解放感がみなぎっていた。教科書はそまつで、参考書もなかなか手に入らなかったが、自分たちの手で新しい伝統を生み出すのだという新生期のエネルギーが、学校をしっかりと支えていたのである。

私学経営の苦難　私学経営に苦難はつきものである。しかしその程度には、やはり時代によってかなりの違いがある。戦前では、昭和六、七年ごろの金融恐慌時が本校のもっとも苦しい時期であった。そして戦後においては、二十年代がそうであった。

敗戦後の日本の政治は、連合国軍最高司令官の管理下に置かれることになったが、その占領政策の重点は、財閥解体、農地改革、労働三法の制定の三つだった。中でも岩手奨学会にとって、もっとも大きな打撃となったのは、地主的土地所有の撤廃を目指す農地改革であった。所有地を国家によって強制的に買い上げられ、奨学会の資産は減少し、本校の経済基盤が大きくゆさぶられた。これに加えて、インフレーションの激化が、いっそう事態をむずかしくした。二十年代に、授業料その他の値上げ申請が何度も出されていることからも、当時の経営の苦難がしのばれる。

しかし、三田義一理事長はよく難局に処し、岩手中・高等学校の崩壊を防いだ。そればかりか、苦難の時期にもかかわらず、二十六年には創立二十五周年記念式典を盛大に挙行し、その記念事業として二十九年には石桜図書館を竣工させた。

そのような努力があったればこそ、苦難を乗り越えるにとどまらず雄躍期を迎えることができたのである。

一貫教育の長所　戦後の学制改革により、旧制中学の大きな特色だった五年間の一貫教育に終止符が打たれた。代って義務教育の新制中学が登場し、三年間の中等教育がそこで行なわれることになった。さらにその上には、三年間の高等学校と四年間の大学が置かれ、六・三・三・四の学校

体系が制度化されるにいたった。

新制中学校の設置義務者は、小学校同様、市町村とされた。このため、各市町村は昭和二十二年春に、あわただしく中学校を新設した。その多くは、施設の面でも職員に関しても、きわめて不十分な状態で発足せざるを得なかった。

これに比べると、旧制中学校の伝統を持つ学校は、はるかに恵まれた立場にあった。本校も、まず旧制中学を新制に切り替えたが、続いて新制高校をも設置することにより、事実上六年間の一貫教育を、旧制以来の施設と職員で、比較的円滑に行なえる体制が整った。

中学進学生を持つ県内各地の父兄の間に、地元の急造中学に子供を行かせるよりは、むしろ伝統あり態勢の整っている岩手中学に入れたいという気持が生じたのは当然だった。こうして昭和二十二年度から数年間、入学志望者が本校に殺到する現象が見られたのである。市内名門小学校の優等生が、岩手中学の入試でふり落とされるという事例さえ生じた。ちなみに、昭和二十二年は、定員一〇〇名に対して応募者が二四九名に達し、そのうち一一〇名だけが合格した。また翌二十三年は定員一〇〇名に対して実に二九四名が応募し、うち一二七名だけが合格している。

その生徒たちが岩手中学校・岩手高等学校の六年間一貫教育を受け、高校三年生になったのは、二十七年以降だった。その中の一人、田村寿は、二十七年八月の岩手日報主催学力コンクールで県下二位を占め、二十八年一月の同コンクールでも四位になって万丈の気を吐いた。また、二十八年六月に行なわれた東大学力増進会主催の模擬進学適性検査全国コンクールで、三年の松野淳一が九十二点という驚異的な得点をあげて全国一位になった。なお、前記の田村寿は東京大学理科三類に、また松野淳一は東北大学理学部に、それぞれ入学している。この両名以外にも、京大をはじめ全国の有名大学に多数の合格者を出し、岩高の名を天下にとどろかした。一貫教育の長所が、もっとも遺憾なく発揮された時期だったのである。

石桜会の民主化　大正十五年七月に、本校の生徒と職員を会員とする「岩手中学校石桜会」が発足した。大別すれば総務部・学芸部・体育部の三部からなるこの組織は、その下に多くの会や部を単位組織として持ち、それぞれが活発なクラブ活動を展開した。この古い石桜会の大きな特色は職員の指導責任が重視されていたことだった。具体的には、学校長が会長をつとめ、単位組織の責任者である部長幹事にも、職員が任命された。部長幹事の下に複数の委員がいて、生徒の部員を代表する形になっていた。

ところが、戦後、教育の民主化が叫ばれ、生徒会の活動にも自主性が要求されるようになると、従来の石桜会組織のままでは、縦割りの色彩が濃すぎるという問題が生じてきた。そして、石桜会の改組が課題とされるにいたった。たまたま昭和二十四年度から、アメリカの教育制度を手本にして、ホーム・ルームの組織が導入されており、結局それが、新しい生徒会の母体となった。

二十四年の十月に、ホーム・ルーム委員会が、

グリークラブの情熱

昭和二十三年度の新学期に着任した生内義夫教諭は、粗野な風潮に走りがちな男子校に音楽を通じてうるおいをもたらした。授業で同教諭のピアノとバリトンに接し、芸術の真価に開眼した生徒は多い。さらに音楽部の部長として、若い情熱を指導に燃やし、みごとな男性コーラス・グループを育て上げた。音楽部員をメンバーとする、本校グリークラブの誕生である。

当時、体育部のめざましい活躍に比べ、文化部の活動の低調ぶりが嘆かれていたが、その中にあって音楽部は猛練習に励み、急速にその実力を伸ばした。創立記念日や運動会のときに発表される合唱を聞いて、だれもがその成長に驚いた。こうして指導者の情熱が部員の情熱を引き出し、両者が一体となっていい結果を生んで行く。

翌二十四年には、グリークラブとしてのみならず、岩手女子高校音楽部と合同で「岩手フィルハーモニックソサイティ」を結成して、混声合唱にも力量を発揮するにいたる。それが県主催の第三回岩手芸術祭に参加し、本校国語科教諭水原一作詞、生内義夫作曲になる新作カンタータ、〝北上川〟を発表して、聴衆に深い感銘を与えた。ここに、岩高音楽部に対する高い評価が確立されたのであった。

生内教諭の本校在任期間は、二十五年春までの丸二年間と短かかったにもかかわらず、その残した遺産は大きかった。

生徒会組織の検討に着手した。その概括的な案が職員会議で承認され、以後、具体的な立案作業に入った。すなわち、各学級から二名ずつの代議員を選び、代議員会とホーム・ルーム委員会とが、石桜会の改組案を練った。十一月には、代議員がそのまま起草委員となり、新規約を起草した。その結果を、何度か各ホーム・ルームと職員会議が審議し、原案に修正を加えた。こうして、石桜会の新規約が十二月五日に可決され、学校長の承認を経て、十二月七日から施行された。

この石桜会改組の最大の重点は、生徒の自主性が大幅に認められたことだった。これまで組織の中枢にあった教職員は顧問および指導係として、間接的に参画する形となった。したがって、会長副会長、書記、会計などの役員は、すべて生徒の中から選出される。執行機関として総務委員会が置かれ、ほかに企画・実行機関である生活、学習、出版、文化、体育の五つの常任委員会が設けられたが、その構成メンバーも生徒だけである。

ただし、石桜会が学校内の組織である以上、その最終責任は学校長に帰属するという考えかたにもとづき、生徒の権限は学校長から委任されたものという原則が規約に明記された。また、文化委員会と体育委員会に属する各部の部長には、職員が任命されることになった。このあたりに、旧石桜会時代からの構成形態が残っていた。なお昭和三十八年度以降、生徒から部長を選出し、職員は顧問として参画する形態に変って、今日に至っている。

石桜会新規約成立直後の役員は、つぎのとおりであった。

会長	高小野寺由也
副会長	村松由高
	宮手毅
書記	中田村寿
	高井藤博
	村上照五郎
	中小田島城二
	藤村三郎
会計	高金田一直
	小林陵二
	中野村道夫
	小林騏一郎

PTA結成　戦後の新教育は、制度と内容の両面にわたってアメリカに範をとっている。このため、カリキュラム、ガイダンス、ホームルームなどの横文字が教育界にはんらんした。PTAもそのひとつで、父母と先生の会という意味の英語、ペアレント・ティーチャー・アソシエーションの略である。古くから学校ごとに〝父兄会〟がつくられていたわが国では、PTAすなわち父兄会と受取られがちであったが、本来は両親と教師、あるいは家庭と学校とが、たがいにその立場を理解し尊重しあいながら、連絡を密にして教育効果をあげようとする自主的な教育団体にほかならない。

本校の場合、昭和三年に岩手中学校父兄会が発足し、その後〝後援会〟と改まって、年々活動が続けられてきた。この後援会が発展的に解消されて、岩手中学高等学校PTAとなったのは、岩手高校設立後まもない昭和二十三年六月十九日であった。初代の会長には足沢勉が選ばれた。

「石桜」四十五号（昭和二十三年十二月発行）に、初代会長の抱負がのっている。

「現今我国の情勢は、六三三制が実施せられ、教育委員の制度と共に教育の刷新を図り、平和日本の建設に邁進せねばならぬ時であります。従がって従来の後援会もPTAの型に代り、父兄と教職員と社会とは三者合体の下に子弟の教養に当らなければならね事になったのであります。ここに於て我が岩手高等中学PTAが組職せられ、その目的要項は会則各項目にわたり明記せられてある通りであって、今さら述べるまでもないところであります。

（中　略）

我が校は私立学校であるが為に、後援に於ける寄附行為も官公立学校に比し簡単適切に実際化せらるる事は好都合な点と考えられるのであります。後援会は単に物質的方面のみに限られるものではないと思われます。物心両面に於て、関係者各位は渾然一体となり、生徒の教養に当

同教諭は退職後も折を見て来盛し部員の指導に当った。たとえば、〝岩手高校創立二十五周年記念祝典カンタータ〟などもその結晶で、作詞水原一、作曲生内義夫の名コンビの生んだ作品が、グリークラブの情熱あふれる演奏によって紹介され、それを聞く者の胸に感動をよび起こしたのである。

らなければならぬものと痛感するものであります。

（後　略）

こうして戦後発足したＰＴＡは、まず校内に小規模な博物館を作る計画を立てた。これは、当時の教材不足をいくらかでも補うために、父兄がそれぞれ自分の職業に関係のある品物を持ち寄ったり、家庭にある化石・剝製等を回収したりして品数をそろえ、学校での研究材料にしてもらおうというものだった。規模としてそう大きなものにはならなかったが、父兄のなみなみならぬ熱意を物語る計画であった。

父兄の熱意は、旺盛な知識欲としても現れている。ターナー女史を二度も招き、アメリカの教育事情や家庭のようすを知るといったように、しばしば講演会が企画され、開かれている。さらに、職員に越冬資金の提供を申し出るなど、経済援助をしようという動きまであったが、これは、学校の方針として固辞せざるをえなかった。それでも何度か図書購入費がＰＴＡから学校に支出されている。

その後三十年代以降も、ＰＴＡは家庭と学校の協力体制を整える上で大きな役割を果たし、たとえば教育施設の充実などに貢献を重ねて今日にいたっている。